

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390200014		
法人名	有限会社のぞみ		
事業所名	グループホーム八代のぞみ		
所在地	熊本県八代市千丁町古閑出421-16		
自己評価作成日	令和5年 10月 18日	評価結果市町村報告日	令和6年 1月 5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do">http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構		
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号		
訪問調査日	令和5年 11月 16日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ゆったりとした田園風景の中にあり、周囲はいぐさや野菜など彩り豊かな環境です。敷地には桜や椿などの草木が多く有り、季節を感じてのんびりと過ごせる空間です。今年で開設17年となり、多くのスタッフは長く勤務し、認知症ケアの理解も深く、利用者と文字通り家族のような関係を築き、利用者は安心して穏やかに暮らしていただいています。コロナの影響で、地域との各種交流、いきいきサロンや地域の催しも参加する機会が少なくなっていますが、ようやく、地域との交流も戻り始めています。地域の方々と一緒に暮らしを楽しめる空間にしていきたいと思ひます。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「いつまでも自分らしく生きる」ことを理念とした事業所での生活は、入居者にも馴染みのある田畑の様子で四季を感じ、事業所周辺の季節を感じる木花を楽しみながら穏やかな様子を感じます。訪問時には入居者同士の談笑も見られ、気軽に声も掛けて頂けます。近年、高齢化による身体状況の変化、認知症の進行等で個別対応の必要性が多くなっているようですが、基本的ケアに加え一人ひとりそれぞれへの支援を行うことで理念を目指したケアが行われています。職員育成にも力を入れており、コロナ禍でも職員会議や勉強会、災害に対する訓練等、継続して行われています。重度化や終末期に向けた支援についても「プロセスが重要である」と話し合いを重ねることが大事と捉え、取組みがなされています。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「いつまでも自分らしく生きるために」という理念を掲げて、利用者本位の支援をすることを毎朝の申し送り時に職員全員で唱和し、全員がその理念を共有し、常に意識し、実践するよう心がけている。	開設以来の理念は毎日唱和することで共有されている。近年入居者の高齢化や身体状況の低下・認知症の進行等で入居者の個別対応が必要となってきた状況の中、理念の実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍のために、地域のイベントが中止となり、地域とのつながりが希薄となった。最近、イベントも復活の兆しがあるが、利用者自身の高齢化・能力低下により、参加できるものは少ない。	ここ数年のコロナ禍では入居者と地域のつきあい支援は難しい状況であったが、今年度は中学生の職場体験の受入れを行った。運営推進会議では地域老人会からの声掛けもあり、少しずつではあるが再開できるような支援への取組みを検討している。	コロナ5類移行後、少しずつですが交流に向けた取組みの始まりの様子を確認できました。この数年の入居者の状況変化から難しい状況もあるでしょうが、できる範囲での交流の再開に期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍のために、外部との交流機会はほとんどなかった。入所申込み等の問い合わせには、丁寧に説明するように努めている。地元中学校の職場体験は受入れている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ5類移行後、開催できるようになった。ホームの活動や研修などを家族や委員に報告。家族の参加が少なく、踏み込んだ意見交換はほとんどできていない。	今年度は対面での開催も可能になり、事業所の取組みをより伝えることができている。入居者に対する支援状況の他、職員研修や身体拘束への取組み等、詳細な報告を行っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	千丁支所の担当の方が運営推進会議に出席され、ホームの状況を把握していただいている。他に、町内のまちづくり協議会などで、町の最近の情報等につき声をかけていただいている。	運営推進会議には市支所職員や包括支援センターの参加があり、事業所の取組を説明している。日頃より市・支所への報告連絡相談や、市主催の懇談会出席、地域包括支援センターとの意見交換愛出席等で協力関係の構築に取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員会議時に内部研修として「身体拘束をしないケア」について職員全員で勉強している。虐待防止指針及び体制の整備を進めている。夜間を除いて、玄関は施錠せず、外に出たい方がいれば、一緒に寄り添う対応をしている。	職員会議を利用して身体拘束をしないケアについての学びを共有している。運営推進会議でも「身体拘束適正化検討委員会」とし、現状の説明や職員の言葉掛け・口調等についても報告を行っている。日常生活では、病院からの退院後、急な生活の変化に混乱がないような配慮も行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部研修で、虐待防止の取組みを繰り返し学習し、実践している。対応が困難な利用者が出て、職員もストレスが生じやすい状況ではあるが、職員間で話し合いを持ち、不適切なケアにつながらないようにお互い注意し合っている。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護についてWEBで研修する機会が何度かあり、制度の理解は進んでいる。以前、社協の日常生活自立支援事業と成年後見制度を利用された方があり、具体的な事例を通して理解を深め、情報を共有していきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に際して、関係を構築する始まりで非常に大切なので、重要事項の説明を十分行い、疑問には納得がいくよう説明に努めている。介護保険の改定等には、変更点の説明を十分行い、理解を得て同意書を取り交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍のため、家族との面会が少ない状況だが、利用者・家族の意見や要望には職場全体で共有し、運営に反映させるよう努めている。	以前のように居室等での家族面会は難しい状況が続いているが、玄関での入居者と家族の面会を再開している。家族来所時は職員からも入居者に関する報告を行うとともに意見を得る機会としている。運営推進会議にも参加案内を行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や毎日の申し送り時、法人の全体会議等で意見や要望を聞く機会がある。目標シートのやり取りを年2回実施していて、職員の意見や提案を聞く機会を設け、運営に反映させている。	日頃より職員は管理者・代表者に意見を述べるができる。定例会議も毎月行っており、年2回の個人面談も継続して行い、個人的な意見も述べる機会がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の業績や貢献を評価するにあたり、目標シートを活用している。目標の進捗や達成状況を意識して、各自がモチベーションを高く持って働けるように努めている。人材育成に向け、給与水準の向上を検討している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍のため、集合型の研修が途絶えていたが、地域密着型サービス連絡会の研修やWEBを利用した研修も増えてきた。徐々に参加を促し、資質向上を目指したい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍のため、他事業所との交流はほとんどないが、地域密着型サービス連絡会のネットワークを活用して、今の課題を持ち寄って、解決に向けた協力関係を発展させていきたい。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居に至るまでの経緯や本人の困りごと、家族への思いなどをできるだけ把握し、不安な気持ちを少しでも軽減できるように、本人の話や訴えをしっかりと傾聴する。そのことを通じて、信頼関係を構築し、安心して生活できるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に至るまでの経緯や家族の困りごとや苦勞について何うにあたって、不安が大きいと考えられるので、ホームのこれまでの受け入れ事例や入居後の変化の事例などを話すことにより、家族の不安を軽減していくことに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居に至るまでのケアマネジャーや主治医と連携し、本人が必要としている支援を見極めるように努めている。医療的支援やリハビリの必要がある方は他サービス利用を含めて相談に乗るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人と職員とは文字通り、家族のような関係で、本人のできることは続けていただき、一方的に支援するのではなく、家族の目線に立って、できない部分を支援していくように心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍のため、家族は面会ができない状況が続いたが、数少ない面会や電話等で家族の思いをできるだけ汲み取り、支援にあたり家族とともに支援する関係づくりに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍のため、馴染みの方の面会がなくなくなり、馴染みの場所への外出等がほとんどなくなっている。昔馴染みの方が訪ねて来られた際、利用者は非常に喜ばれるので、次の機会もお願いしている。	この数年間、コロナ禍により馴染みの人や場の関係継続支援が難しい状況である。以前は知人の来訪も見られた。現状では家族との関係が希薄にならないよう電話等で連絡したり、入居者の好みの品物の差入れ等も見られる。	コロナ禍で支援が難しい状況が聞かれました。家族の面会受入れを再開していただければ、「共に支える」立場として様々な場面での家族への協力依頼の継続に期待します。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	認知症の進行で、利用者同士の会話は減っている印象だが、職員が上手く会話の橋渡しの役割を担って、お互いに支え合う関係になっていて、同じ空間で過ごすひとときを満喫している。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も本人様の様子を教えていただく家族もある。懐かしく思っていたきありがたく思う。自宅に戻られたケースで、家族が「躊躇したが、悔いなくて良かった。」との話を伺った。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	認知症が進行して、本人の意向を把握することが難しくなっているが、入居時の聞き取りや日頃のケアを通じて、本人の思いや希望を把握し、困難な場合でも、職員で話し合っ、本人本位の対応ができるように努めている。	この数年間で入居者の高齢化・認知症の進行等で思いを表すこと、選択を促す言葉掛けへの返答も難しくなった入居者も増えている。家族との連携で声掛けを続けている入居者もおられる。日頃の職員の寄り添いや家族への確認で思いや意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居までの生活歴や生活環境の情報を把握し、できるところはホームでも継続し、本人が過ごしやすいと思えるように、本人の希望に沿う形で進めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日勤の職員、夜勤の職員のそれぞれから、心身の状態の変化や残存機能の状態などの情報を申し送りや職員会議で共有し、現状を把握するとともに、その変化に応じた対応ができるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者ごとに担当を決めて、担当者を中心に課題やケアのあり方について、毎月、職員会議で話し合い、状態に応じた介護ができるように介護計画を作成している。相談を受けた家族等の意向も反映させるようにしている。	介護計画作成・見直し等には入居者それぞれの担当職員も関わっている。毎月の職員会議にモニタリングを行い、全入居者についての意見を出し合い情報共有を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者個別の経過記録に日々の様子を記録し、職員会議や申し送り時に職員間で情報を共有し、介護計画と実践状況を評価し、計画の見直し等に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	法人の他サービス(デイサービス、有料老人ホーム)に応援に行くこともあり、グループホーム以外での取組みを経験し、グループホームでのケアのヒントを得ることもある。特に、デイサービスでのレクリエーションは勉強になる。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍のため、地元を含めて外部と交流する機会がほとんどなく、いきいきサロンやボランティア活動など、これまでであった活動、なかった活動含めて、今一度、交流に向けて地域資源の把握に力を入れていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	8名の利用者が協力医にかかりつけ医として月2回の訪問診療を受けている。認知症専門医の受診をされる利用者もあり、認知症の症状の変化に際して助言・アドバイスを頂いている。	入居前からのかかりつけ医の継続した受診を支援しているが、現状、殆どの入居者が協力医をかかりつけ医としている。協力医からは訪問診療を受けている。専門医等への通院や体調変化による心配がみられる際には職員付き添いで通院する。日頃の体調管理には看護職員も関わる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は利用者に心身の状態の変化があれば、随時、看護職に報告・相談し、意見や指示をもらい、適切な看護につなげている。看護職から医療的な知識を受けようになり、根拠を持ってケアできるようになってきている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、日常のバイタルデータの推移などの情報を提供したり、退院時には、病院での様子やホーム復帰に向けてのアドバイスをいただくようお願いしている。病院の地域連携室とはやりとりの機会もあり、入居に繋がるケースもあった。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化や終末期に向けた事業所方針を説明し、入居後は状況の変化を捉えて、かかりつけ医と十分話し合っ方針を決めるように支援している。事前指示書を定期的に取り交わしているが、最近は、「人生会議」(ACP)への関心の高まりを感じる。	重度化や終末期に向けた事業所の方針と対応は入居時に説明している。実際にその時を迎える際には都度医師他関係機関を含め話し合いを重ね、看取りまで希望される際には支援を行っている。研修のテーマとして「人生会議」を取り上げ、プロセスが重要であることを共有し、話し合いを重ねることが大事として取組みを始めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変や事故発生時に備えた対応マニュアル等を整備し、看護職、管理者と連絡・相談し、早期に医療の支援に繋げるように努めている。日常的に、看護職から医療的な指導をもらい、対応力を高めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	熊本地震の後、地震(及び火災)を想定した訓練を多く経験した。最近台風などの水害が差し迫ったリスクと考えており、避難の判断やタイミング等を法人全体で課題として検討している。(BCP含む)	火災だけでなく自然災害にも備えた訓練を行っている。海拔0メートル地域であることから、水害を想定し地域施設まで車での移動訓練を行った。地震想定ではシェイクアウト訓練を利用し頭巾・ヘルメット着用し行った。BCP計画作成については、職員会議で「PDCAがうまく回るよう動いていく」ことを共有した。	職員会議で災害対策について振り返りを行い、法人全体での仕組み作り等について話し合いを重ねている状況が確認できました。BCP計画策定の際は、職員間での読み合わせ等、共有の機会作りを期待します。

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの気持ちや性格を理解するよう努め、入浴時や排泄時などに、それぞれの尊厳を損ねたり、羞恥心を感じさせることがないように、それぞれへの言葉かけに注意している。	「いつまでも自分らしく生きる」を理念に掲げたケアを行っている。特に排泄・入浴時の羞恥心に配慮し、「個人スペースの尊重」の必要性を共有している。入居者の認知症の進行もあり、入居者本人の「羞恥心」が薄れていると感じる場面もあるが、変わらないことを基本とした対応を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の話を傾聴し、思いや希望を表しやすい雰囲気を作るように努め、自己決定にあたっては、二択、三択など選択肢を示して、意思を確認するように配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	概ね、一日は本人のペースに合わせて対応するように配慮している。但し、食事や入浴については施設の都合で決まっているが、状態に応じて、本人の自由に任せている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	清潔な衣類を身につけてもらうようお願いするとともに、本人の希望に沿った衣服選びができるように支援している。コロナ禍で、訪問理容の機会がなくなったが、再開を検討している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	口から食べることの楽しみや重要性を理解し、きざみの加工や旬を意識した食材などに配慮している。現状、利用者と一緒に準備や片付けは難しく、野菜の皮剥きなどに限られる。調理の簡便化をねらい、加工済み食材も導入している。	職員体制もあり、現在は手作りに加え加工食材も利用している。野菜等の差入れもよくあり、数人ではあるが下拵えからの関わりもある。年々入居者と一緒に行う料理やおやつ作りも難しくなった。入居者より刻み・ミキサー対応、その日の体調による対応も臨機応変に行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	調理済み食材を導入して、栄養バランスなどに注目している。食事量・水分摂取量が少ない方には、摂取量に応じて、栄養補助食品を活用して、栄養バランス維持を目指している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、本人の力に応じた方法で、口腔ケアを実施している。最近、義歯トラブルが発生する方があり、歯科医や歯科衛生士の支援を受けるケースも増えてきた。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄記録に留意し、それぞれの方の排泄パターンを共有し、職員全体がその日の状態に応じた、スムーズな誘導・支援を心掛け、上手く声かけして、汚染の回数が減るよう努めている。	記録等により入居者それぞれに合わせた声掛け・誘導を行っており、できるだけトイレでの排泄を支援している。パット使用後の処理に不安が見られる入居者にはプライバシーに配慮しながら同室する場合もある。パット・オムツの種類変更の際には検討を重ね家族に同意を得ている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄記録を検討し、看護職やかかりつけ医のアドバイスを通して、食べ物・水分の工夫(ヨーグルトなどの乳製品)や軽運動の促しなどで、整腸を意識している。適切なタイミングで下剤を調整しながら、便秘の予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	従来から入浴のタイミングや回数は施設の都合で週3回となっている。中には、入りたくない利用者もあり、本人の希望を尊重し、可能な時間帯での対応に代えている。可能な利用者には、着替えを自分で準備していただくよう働きかけている。	週3回の入浴を基本としている。入浴時の着替えはできるだけ入居者本人に揃えてもらえるようリスト等を利用して働きかけている。入浴が難しくなり機械浴の必要性を感じるようになった入居者は、隣接する法人他事業所への住み替えを検討される例もあった。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温や明るさなどの調整は利用者の好みを尊重して対応している。不眠の様子があれば、職員と一緒に話を傾聴するなど安心して眠れるように工夫している。眠前薬で上手くコントロールできている方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬について、薬剤情報提供書を確認し、理解し、状態に変化があれば、看護職やかかりつけ医に相談し、適切に対応できるよう心掛けている。誤薬がなく、確実に服薬できるように、しっかり服薬確認をとる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	料理や掃除の手伝い、洗濯物たたみや新聞紙たたみなど、これまでできていた習慣は続けていただいている。コロナ禍で外出機会が減っており、室内のウォーキングやエアロバイク、簡単なレクリエーションで気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍のため、戸外に出掛けることはほとんどなく、家族との外出もかなわなかったが、これからは徐々に外出活動を実現させたい。地域のイベントも復活し始めており、少しずつでも参加していきたい。	コロナ禍で計画による外出が難しい状況が続いていたが、今年度はドライブにも出かけることができた。日常生活では敷地内での花見弁当や焼き芋を楽しんだり、日光浴等、外気を感じる取組みを行っている。	今年度は季節の花見ドライブや外出先でファストフードを楽しむ等、少しずつ以前の生活が戻ってきている様子も聞かれました。課題とされているように、家族協力での外出や地域との交流等が再開できるよう期待しています。

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理はホーム側が行っており、本人が希望されたり、必要と考えられるようなときは、管理者・事務長に相談して、買い物物の支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙は家族からいただくことがほとんどで、電話を希望される方には、そばに付き添って支援することがある。難聴や認知力の低下で電話のやりとりは困難な方が多い。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の居間は清潔に掃除をし、空調・テレビの音量にも配慮している。眩しくてテレビがよく見えない方がいるので、カーテンで調整するなど配慮している。季節ごとに手作りの装飾や利用者の塗り絵作品を飾って季節感作りを意識している。	入居者にも馴染みのある田畑の様子が臨める温かい雰囲気の共用空間では、ソファで談笑する姿やリハビリに励む姿も見られる。廊下には手摺りも設置され、入居者の自由で安全な移動にも配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにあるソファに思い思いに気の合った方の近くに座っていただいている。自室にて過ごしたい方にも、自由に行動していただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	寝具や家具などは本人が使い慣れたものなどを自由に持ってきていただいている。衣替えなどは担当職員と家族でよく相談して、季節に対応するように心掛けている。	陽当たりの良い居室には仏壇やテレビ、家族写真や手紙等、家族の関わりを感じる品み見られる。居室にはベッド、洗面所、押入れがあり、安全にも配慮されたすっきりとした空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや浴室、各居室などは、わかりやすいように絵柄や文字の大きさを工夫している。照明を調整したり、整理整頓を徹底して、安全で、自立した生活に寄与する工夫をしている。		

## 2 目 標 達 成 計 画

事業所名 グループホーム八代のぞみ

作成日 令和 6年 1月 5日

### 【目標達成計画】

優先 順位	項目 番号	現状における 問題点、課題	目 標	目標達成に向けた 具体的な取組み内容	目標達成に 要する期間
1	2	ここ数年のコロナ禍のためと、入居者自身が高齢化・心身の機能低下が進んで、できる活動も少なくなってきたことも合わせ、入居者と地域とのつきあい支援は難しい状況だった。。	今後の感染症の流行状況にもよるが、家族や地域の馴染みの方との交流を制限なく実施し、地域の一員として参加するイベントの機会を確実に増やしていく。	感染症などの対応策を徹底し、安心して交流できる環境を整える。また、地域のイベントの状況を把握し、ホームの事情が反映されるような提案が可能なら具申し、交流の機会を増やす。	2年間
2	49	コロナ禍のためと入居者自身の機能低下の影響で、家族との外出機会がほぼなくなり、戸外に出かけること自体、極端に少なくなった。	本人や家族の希望に沿うように外出機会の確保を支援する。家族や地域の支援者の協力を得て、思い出の地や馴染みの場所に行けるように支援する。	馴染みの飲食店や美容院などから手始めに、本人及び家族から情報を入手して、好きだった景勝地や思い出の地への来訪を実現する。	2年間
3	35	当地で想定できる地震、台風などの自然災害や火事などの災害に対応した訓練や備蓄を進めているが、地域との協力体制が未整備である。	近隣の住民や地域の自治会や消防団等との協力体制を築いて、いざというときにお互い協力し合える関係を構築する。	ホームが実施する各種防災訓練時には地域の方々に参加していただき、また、地域での訓練に際してホームとして参加することで、相互の協力関係を築く。	2年間
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。

